

Structures and Meanings of Adjectives in Chaucer's *Troilus and Criseyde*

チャウサーの『トロイルスとクリセイデ』における形容詞の構造と意味

(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号： D165542

氏名： 周 躍

本論文はチョーサーの『トロイルスとクリセイデ』(以下 *TC* と略称する)の形容詞を対象とし、その「構造」と「意味」を「統計」と「精読」の2つの方法で徹底的に分析したものである。主な目的は以下の2つである。1つは詩人の創作習慣や技法を探り、彼の言語芸術の一端を明らかにすることである。もう1つは、形容詞の持ち得る微妙な意味合いなどを究明することによって、作品解釈に新たな知見を提示することである。

本論文は、序章と、5つの章からなる本論、そして結論によって構成されている。「構造」と「意味」を完全に分離して論じることは困難であるため、全ての章において形容詞をこれらの2つの視点から論じる。また、より客観的かつ正確な結果を得るため、*TC*の全形容詞を含んだデータベースを作成し、「統計」に基づきながらも、その主な原典である *Il Filostrato* (以下 *Fil* と略称する)、ほかの中期英語の数十作品、またはチョーサーのほかの作品との比較を行った。さらに、代表的な形容詞をとりあげ、「精読」でそれらに含まれるチョーサーの意図を詳しく考察・分析した。

第1章では「構造」の中で最も目立ち、かつ様々な登場人物を修飾する「並列された形容詞」を中心に考察を行った。単に頻度から見ても、チョーサーは「並列された形容詞」を好んで使ったと推測される。このような用例の分析は彼の創作習慣の解明に重要な価値がある。この章では、チョーサーが形容詞を並列して使った目的を考察したほか、「並列した形容詞」を「話者」、「修飾対象」などの角度からも分析し、並列される頻度の高い形容詞を対象に、形容詞間の位置関係や意味関係についても論じた。さらに、*Fil*との比較で、チョーサーが原作から受けた影響、および翻案の際に施した独自の改変を中心に、その精妙さと芸術性も明らかにした。

続いて、第2章では主人公のトロイルスを修飾する形容詞について分析を行った。チョーサーの作品を全体的に見ると、騎士を主な登場人物としたものが多く、この章の冒頭では、そのような6作品を扱い、作品間の傾向やチョーサーの創作技術を論じた上、トロイルスをほかの騎士と比較し、彼を修飾する形容詞の特徴を考察した。続いて、トロイルスを修飾する形容詞のうち“wise”、“worthy”、“wo-bygon”の3つの代表的なものを詳しく分析し、それらが表した登場人物の意図、感情、また先行研究に言及されていなかったニュアンスなどを解明した。

第3章ではヒロインのクリセイデを修飾する形容詞を扱った。この章の主な目的は、まずクリセイデの繊細な感情を分析すること、それから裏切り者の父を持った未亡人の

彼女について、彼女自身、そして他の登場人物やナレーターが如何に見て考えたかを考察することである。本章では形容詞を「話者」ごとに分け、それぞれの全体的なデータを検討した上で、特徴的なものとして、“fresh”、“gay”および“lufsom”を詳しく考察した。

第4章ではもう2人の主な登場人物のパンダルスとディオメーデを修飾する形容詞を扱った。まず、3章と同じように、パンダルスを修飾する形容詞を「話者」と「話す相手」を基準に分類し、分析を行った。その中で取り上げた主な形容詞は“wylde”、“mad”、“confus”、“skillful”と“resonable”であった。これらの形容詞の分析で、登場人物の関係や、チャーサーが形容詞を選ぶ際の傾向など有意義な結論が得られた。この章の後半では、ディオメーデを修飾する形容詞の考察を行った。

最後に、第5章では自然と関係する形容詞に焦点を当てた。すべての形容詞は修飾対象別に分類され、詳しく分析された。この章ではチャーサーが形容詞に暗示など重要な情報を込めたということを再確認できた。また、登場人物の性格をまた別の角度から見ることができ、全体的の人物像がより豊満になった。

本論文はTCの形容詞を様々な角度から詳しく考察・分析し、多くの成果を得られた。